朝夷巡嶋記

第一編

巻一

イ13
939
~~26~~ 1

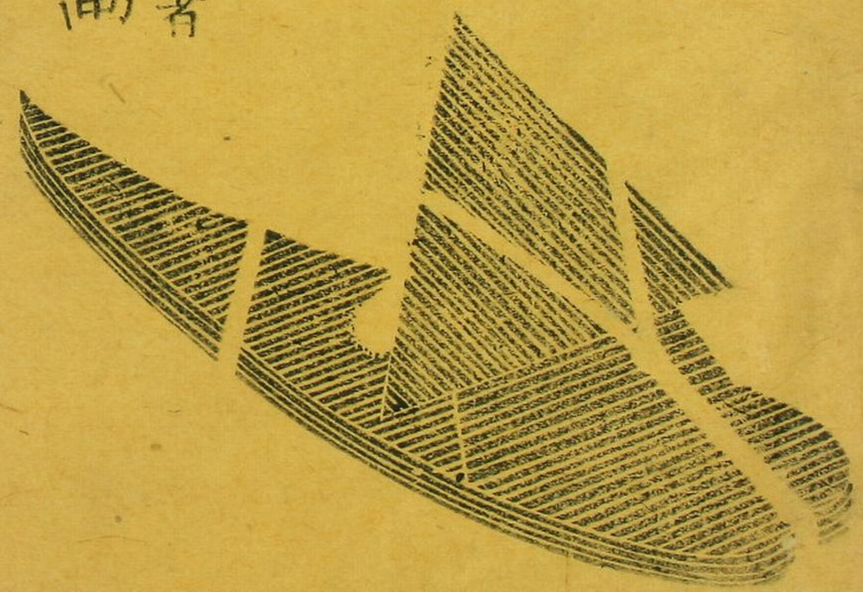
939
26

朝夷巡島記

初輯

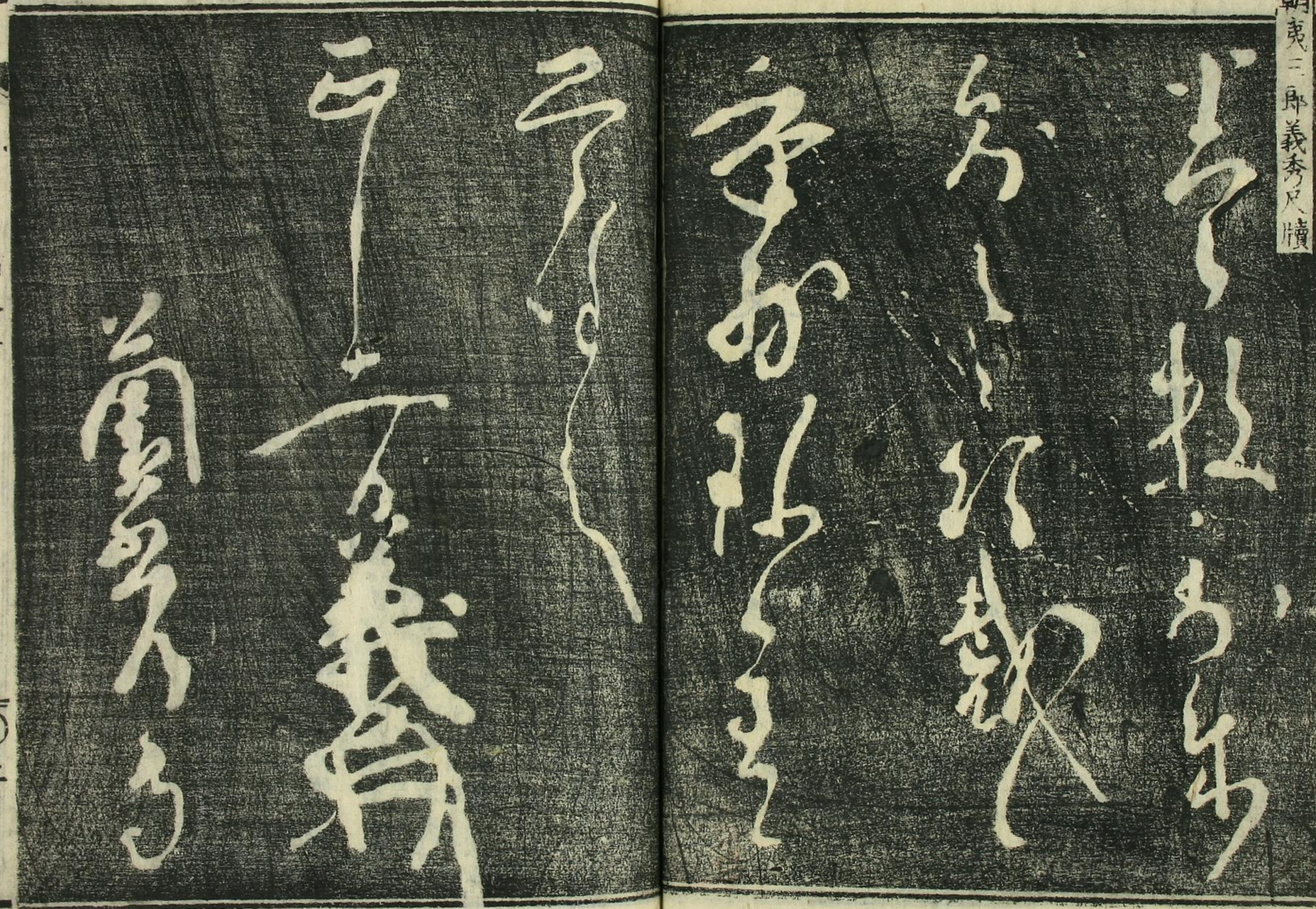
全五卷

馬琴著
豊廣画



此編最就於倉卒之際及命工繡梓未有自序也而書賈又丐之誅求如債將綴數行以塞其責方是之時毛頴氏致仕楮先生離散召之未至卒然搜破篋不意獲墨本一頁素吾藏弆之物平義秀尺牘也雖其書非肉筆歷歷由来存焉既已忘有是書今不求而出猶如有神知吾可用可謂奇矣即影寫之以代序辭聊又陳其事書右端趙再白嘗有詩曰名士本来如畫餅古人原不好眞龍併錄之使閲者知愚意

文化甲戌冬至除夜　簑笠陳人解撰



人各始あるよりその終りなきと鮮し。夫始あり終りあるもの世以て是れ庸人とす。庸人はその名聞を機に臨みて用ゐる所なし。但戦国の勇士は志を成さんと欲し君を練めて私世に陟るに亡命し又四傾の城間隙の日千軍万馬を殺奪して一條の血路を開く或は偽て自焼し屍を焦土の中に示して死を山林に隠し夷狄に走り又人間に還らざるものあり。是れその終りなきものなり。敵を欺く苟も死をおそれ脱れんとするのみあらざる時運を揣て仇を避け命を全して聊か雪んとするのみ。志よりといへども人事は天に推ゆるものなり。跡を暗し影を埋め形を変名に改め禽獣と群居して山谷に老死せしの抑我人ぞ。今軍紀を考へる所数人に過ぎず。所云平惟盛源義経朝夷義秀藤藤房篠塚伊賀の如き逃れて忠走して主を忘れ勇と世を倒しとしその迹を後に残すの亦千載の遺憾なるべきや。そもそも中に義経胡地に走るとて往て野史に見る義秀篠塚に至てその終り知るべからざるの理なり。

三勇士の名の假托し。四字小説を作て彼長物を獲せしめ年あるといまだ果さざるの春夏を起しくはざる義秀の名つけて朝夷巡嶋記といふその事虚中に実を包て唐山演義の書に擬したるなり。東鑑盛衰記及諸軍紀に据るものもあるまた草紙に勇力濫とういふものあるとも為すべきに一巻も引書を求めず。道理を推て隠れて実を知ふ。後世に述るといふ欲するに事実古人に獲つべく。幾を今人に逃れざる又釋氏をもて定規とせざるものあるも自ら古紙勧め悪を懲らし善巧方便とやいふべきか。今茲は夏に小恙ありこれを過るまで筆硯に親しむ時後生と驚さるべく直に誤を繕ひ脱を補ふ暇なし。そもそも又あるとも。ことさらに浪速人の需に応じ。

肇集五巻の稿をもつてのみ

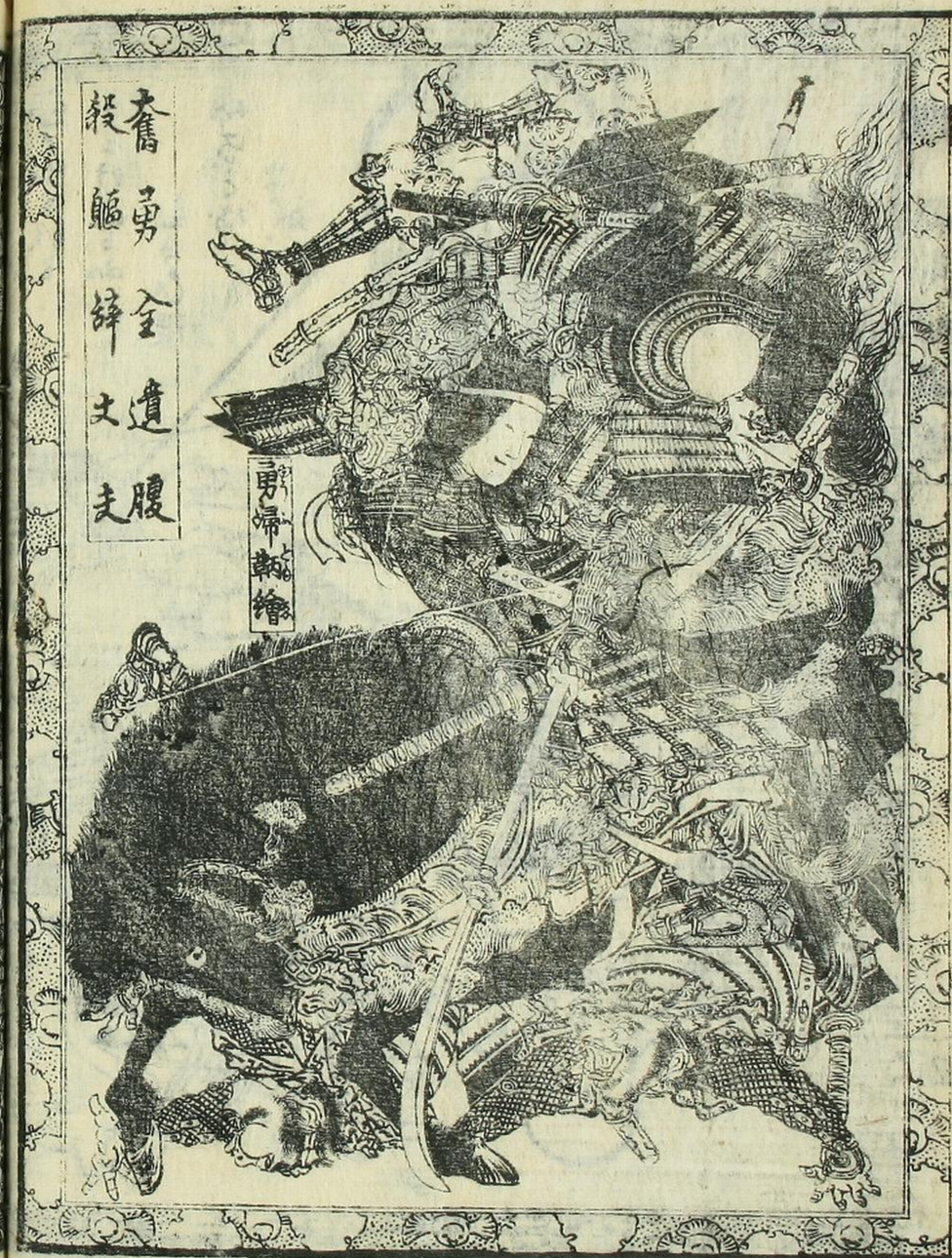
養笠陳人再識

朝夷巡嶋記全傳初輯總目録

第一條　粟津原六出　鎌倉山鼠麹
第二條　月夜竊立鳥　鶏鳴野嶋舩
第三條　遠山寺兒櫻　山脚村教草
第四條　濱驛舘蒲黄　修善寺奔湯
第五條　絲紊幡太薄　促死秋蟄居
第六條　截落刀野爺　返汝湯嶌檜
第七條　林坂牛奔車　榎虚崑崙佛
第八條　歸郷野邊送　復讐記念刀
第九條　朝霧庄司暇　夕立許我郷
第十條　在旅宿元服　大石山遺弓

通計一十條一帙五巻初輯目録終

朝夷三郎平朝臣義秀
英聲
懐絶
域
勇敢
鎮
嶽
むくやうじをきけある山の
むさひ隈
いろとは
ちさ
あさひ
なる
そん
著作者


奮勇全遺腹
殺軀辞丈夫
男帰朝繪

源範頼朝臣
三浦三廣光

山の主魔平太
庵丁乃ふも
ふる寿の袖なれい
ゐとさーえせん
いさえなー魚
處女友蔭

吉見冠者義邦
俳思梭技
盥子花平

刀野大郎峠夏

駿河前司源廣綱
野見堀

出亭家方賣剤畧引

○巻端生育の餘帝あるひと営生要訣の音と録して巻〻四方君子に告ること左の如し

家傳神女湯 一包百銅

即功あり さはふより相伝五世ゐおよびて家ゐ難産夫折の婦人あることを思ひ切るつ用ひ一つぞろつつ紙ゐ巻るつちを比いくさまるくその功抜群自餘乃産前産後ちのみちゐ産剤ゐまさまるよりゐく求メゐ君子ゆゑにいと秘しとふうん

つぢ虫のめ薬 一包六十四銅 半包三十二銅 婦人毎月つぢやゐ月つぢ虫ゐ

いろらくゐ用ひくまめゑ又産後ゐ月ゐ功ゐ

精制衣奇應丸 壱三百粒 余入代弐朱 中包三十六粒入代一分五朱 小包粒入代朱 倶朱より下 小より不仕

世ゐきゐ丸ゐとくゐ製ゐ緑丸ゐ極品をそふまざまゐ奇應丸の名あるとのふともきゐ丸の功のうを思ふる製ゐるとろ薬種のあくしをいとへど量まで法ゐ考ひ制衣法むつをり見とゐつゐの寄意丸ゆゑ ぶれいその功百倍乃諸病ゐ条ほどを療治 毎月七日 廿七日 見ゐて廿三日ゐりを廿七日ゐ朝四ゐ夕ゐ

所ゐまの人ゐ人ゐ来世ゐ ゐ獣物ゐ ゐの ゐ ゐ見ゐ宿ゐ ゐ師小坂先生ゐ席ゐ誌ゐ

右製薬弘所并施療 江戸元飯田町中坂下南側四ゐ ゐ店 瀧澤氏精製

東次所 大坂心齋橋北詰物町南入書森 江戸芝神明前 書肆いつゐ市兵衛

○招牌及報条能書必乾坤一草亭の印記あり此印なきハ偽剤ゐ係記

朝夷巡嶋記 全傳 巻之一

東都 曲亭主人 編輯

初輯 第一

栗津原の六出花
鎌倉山乃母子草

蓋世の勇もこのむべうらぢ経邦の智も涛るゐ足らぢ項羽いちらふ山を拔ち威權西楚ゐ覇ゐしも命運竟ゐ究りてゐ烏江の水逝てゐくらぢ。

韓信ゐ才漢祖を佐ゐ。その功四百餘年ゐ掩へど傲慢上を凌ぢてゐ淮陰の市暮て斬ゐつぢ彼ハ埈下の野戦ゐ頸刎ゐ此ハ未央の宮闕ゐ戮せらゐ。古を視ゐ今とゐくバ。和漢その人又ゐゐり。抑征夷使の朝日将軍従四位下伊豫守源朝臣木曽義仲ハ古春宮帯刀長義賢朝臣の嫡男ゐり。いぬゐ治承四年の夏四月高倉宮以仁王の令旨ゐ應じて義兵を

信濃路に起せしより。同年の冬十月より戦ひ捷攻さに取り。旗を華洛に推靡して平氏を西海へ逐走し。源家ヨの年の鬱懐を一時に開くのみならず後白河院仙院と且く守護し奉る。勲績莫大なるのしるし。官爵輒く祖に超え。武の棟梁と仰れる。功に誇り勇を憑み君を蔑ろにせり。非礼狼藉大いなるのみならず。縛鎌倉に帰せしめ前武備頼朝に臣朝敵義仲追罰の院宣を賜さ。舎弟範頼義経を追討使と定めり。数萬の東軍前駆して兎道瀬田より上洛を時に元暦元年正月廿日義仲これを防んとて。廷尉義廣四郎兼平以下の精兵を両隊に分け。少選防戦ありしに不慮の合戦その機を喪ひ躬を以て続く軍兵なく果敢なく華洛を落されて木曽殿主従僅に七騎且戦ひ且走れども越路を投じ出るもあり。脱出の面は春の雁列を素しく渡と立羽音に信とこそせべ。其首に充満さる。

敵よあふこの粟津なる。森のほとりに隠れ。瀬田の橋の深雪に踏迷ひ。花落葉後れ先ぶり兼平に彼此に隔られ。大将一騎に成り。のこりとも何ゆせん。前面の芝生より左て腰を切らんと。こは管に馬の足掻をそろつ。いひる日を背後に。せ〜ぶ新さえも薄氷の深田に馬を乗入れ〜く。拍どあるまじ。沼も出どある便るゝと。夕間暗に成る。乃星月夜隈て石田が名ハ渡つ箭に。額を項へ。族四五す。うゝやく深疲に小雲時も沼塚に鞍を抱たく臥ゆ。義仲疲れ。ひぬと敵の軍兵罵散動ぶ。今井根井掮錦織大夠木曽殿恩顧の老黨。義に仗恥を去るあり。雖り一人も存命ぶ。箭に渴大刀に折るのみ。奮怒突戦せざるもなく。乱軍の中に殺れ。そ中に。当今一の勇婦と。えし。鞆繪は四郎兼平が妹。義仲朝臣の側室なり。さる剛者なるに北四数度の戦ひに比類なる。働に

えく。その名ハ都鄙ハ高う紀。さるにてをあとこの日この時主後七騎よ
るもそも。拄ハ敵我殺散しくもとく先へ進ミぶ木曾殿これと召とめ。
義仲ハ宿期の軍ハ女人ヨ先陣をさしうるゝどもらまんハ朽惜うるべし加
旗。你ハ去年より懐孕て今ハ産や目ハ暗くなり。ひとり虎口を脱てとく
とく義よと幾遍ヨ身の暇をあらもとども。鞆絵ハ一歩も退ぞ己ハ冥土黄泉
のもん倶とのミ回答ちうしく。群立さる大軍へ会釈もるく突て入り。砂拂ハ大
刀風ハ優ハ草も血ヨ浸さもてく。おろぐ枕ヨ五騎三騎。なれぬ敵へるう
けり。鞆絵ハこの日の打扮ハ紫格子と織ぞさる直垂ハ菊紋を志げくく。
萠黄威の肚甲ハ袖つけく。三尺五すの大刀を佩。廿四差さる圓羽の征箭の
射遣ぞ。紙谷るヨ脊負つ。重藤の弓ヨ迫弦ヶ連銭芦毛の駿馬ヨ
金覆輪の鞍もたく。澄長ヨ弛哩とうち跨ヨ。丈ヨあまもて黒髪ヨ後へ
さんとうちはらく天巻を額ヨ當白打出の盆仰反ハ著るゝ遠山の眉
丹花の脣美目ハ容貌も禍蘭く。亨年ハ二十八現未曾有の男婦ヨ。
夫の為ハ紙ハ〻夫を佐く寂と討さる。東海の烈女ハ形名ハ妻ハいとう
こもハ。ちぶべ兄とく。頻ヨ古紙振ハ。ヨ。ヨとくひとり抽で大刀を合さる
ハ。ハるゝもど。敵貪ヨもハ目をうけく。十重二十重ヨ囲ミ〻ハ。鞆絵ハ主の
先途ヨ沿あらぜ。身ハ只一騎ヨなりハ。ハけもど心ヤうもく焦燥て近つく敵を
蹄ハ〻ぐさせ。左ヨ掛ひ。右ハ當りく。ヨ人郷ヨ入るどく。又一條の血路を開
きく。後へさらと馳出るヨ。ちそもてこれを逐るの色。浩処ヨ遠江州ヨ人
氏内田三郎平季吉。主後三騎馬を飛ハく。透間もなく追蒐ヨ。鞆絵ハ
信とえくりく。物〻や。とハの隨ヨ轡を引かへ。馳ちがのやうハ〻く。先へ進ミ
軍兵ハ鎧の総角をもと合目上るくさ〻揚く。矢声をハる人礫ヨ後もく

進む軍兵が胸骨さへ打砕れ伏累て死でけり。主の内田ハこれを見て。天晴
女が勇力なるかなとてこれも又坂東の力士なれバ眼前に二人かゝて老黨を
討せて阿容とてしかくかのごとき下知すれば後陣に進む甲斐源氏一條が小者
なんどもや這厮ハ万夫不當の勇ありとも鬼神にハよもあらじ。六十人がちから
ありとて人も許せし季吉が日来の本事何時をか期すべき目に物見せんと
鐙を蹴立て真一字によせあハせ名告れバ名告る軍の古実互に知るを
なしとハ大刀を拔ず箭も射かけず寄よや組んと還ちがへて馬の尾首推ならべ。
利腕をとらへて引組ぶり。當下内田ハ逸たゆく鞆絵が黒髪かいつかんで腰刀を拔
出し頸をかゝんとせしかバ鞆絵ハ騒がず打微笑莞爾と和主が挙動る軍ハ
敵によりけるものぞ鳴呼なる所為かなせずともあらんといひつゝ奉め挿り固て内田が
臂を磯と打うちて思ハずも指を開かし刀を奪と落せしかバ鞆絵ハ始

しろと揮ほどに弓手の腕さし伸て兜の真甲しかと搯て鞍の前輪に遍著
つ。内兜にゑを入れて。七寸五分の腰刀を鞘をはらひ拔出し推仰けて細頸をと
放殺とかき断けり。季吉既に討れしかバ敵ハいよいよ近つきて八方より
射かくる箭に鞆絵ハ馬を射倒されて主も鞍居に撞と落起んとせる所
起しも立ず。和田義盛が従累て矢庭に虜にけりとぞ。さる程に
軍果て。和田小太郎義盛が廻らし候鞆絵をゐて鎌倉へ陣せしかバ本林
五郎に領られ頸を刎らるべしと聞えしかバ義盛殊に一を惜みて。
息れぞんるが命を助て。某に賜かし。おもしろからんと申しけれども。
鎌倉殿頼朝ゆるしたまハず。渠ハ女流といへど抜ざる剛のものなるは
豫て聞召ところなれバそれのみならず木曽が股肱と喚れたる中三権頭中
原兼遠がむすめにて女兒今井四郎兼平がためにハ姉主のためにハ側室なりとぞや。

恩顧勇敢有斯せば。君父の仇を報んと思ひざるところなしうち
釋ぎたるのんとく。一切許容るるしるども。ほさるぐ不悪宥め義盛
今只管ふ彼女を乞おうさと。別ふ仔細もいらぎ。但枕席共はこく勇武
子孫を取らんるえいるでる僻事ひべた。と辞を放ち。身ふくえて命を
きるしく入鎌倉殿頼朝も今更ふ義盛ぶ父祖三世の忠義を思ひえやくて。
竟ふ恩免ありしるば義盛大なる歓びく。聽て靭絵をこしとやん。ちのぶ宿
所へ伴ひる。却説義盛ハころを沼さる老女們しく靭絵を勸り慰ぎさせ。
自も又衣裳整ふ。改めく對面。さていふ。私の宿恨ハるるとど敵と
ぶり躬方とあるこ武夫の経るとど今更ハ何とりのべた某此度恩賞ふ
しるるく。和女郎ハ被ひるるるる。ふ愛香ふ惹ひく宿る縁し様
結んとふあらぎ。移ハけんより夫婦ふなりて勇を子孫ふ遺んるのをん

身も既ふ君父のるふ志ハ致しる。然様辭ひく義盛ぶ仇敵を仇ふ思
と正首ふ相潭ハ靭絵ハ貌を更めく。めくもでいるとるると過世あやした
因縁ハ。志りとも忠臣ハ二君ふ仕ぎ貞女いでる両夫ふ見えん生て操様
破んより。死しく世ふ恥るるるそのけとばりゆくえるるく。ふ人の情を
志らぬふ似さる。ん身よいるる上日ふも負るぶ妾も亦亡君ふ負ざふ紛
あるべくと」ど率命まハいひぶ。傷の人を遠離ふ人とりのふ義盛ところ沼て。
老女們を退せその情由を問しる。靭絵ハ頻りふ嗟嘆しん。ふ人の智者
勇士和も漢もるるくふ。その子ハ親ふ劣り待ぎ。ちるそハ父の気様稟ふ母
ふハ肖ぶといふるるふ。らんふ産せくその甲斐るるふ後悔しくでいるとん。
義引くるる一ん加旃ふ踏ふ。木曾殿の亂を宿しく。も四人丹ふるり居り。
身をるるふるるまでハ流石ふ惜ぎ命るるとども他夫ふ仇一身を任せぐるるハ

この故へ。もん身素より嫡妻あり。又両個の子ともあり。義盛が嫡子を常盛と云ひ人の次ハ二郎義氏なり妹使とゝ云ハ名のみ妬ましも軽護ーこと義ゝ氏二ヵ月ハ侍り。誠妾と憐みあらぐ妹使とゝ云ハ名のみ

ゆゝしく小夜の枕を共ふせど。生る児を子とゝく孚ゝ弓箭を継ーゝ事よ

ゝぐ。もん身が伝侯を仇よせど。妾も節操を破るとゝく。恩義ハ繋ぐ又

ーゝ子夫婦血を分。枕をゝぐるゝ。ゝ憑ーく侍りゝん。彩ハ人ゝ聴れざゝ。

今ー面りハ刃ハ伏ゝ身を濡くさゝゝ外ハ乳ゝ侍らゝ。ゝ人ゝ宮答

ゝぐ。義盛幾感嘆ーいゝる所道理ハ稱へり。初念ハ出ひ給ゝ。鎌倉殿ハ

ゝゝしゝく。婦妻ハ女ゝく賜ひ。和女郎ハ仇ゝく嫌ゝゝ弱刀称們ハ

指をさゝゝん。そハ胸苦ーゝゝあゝど。閨門の内をゝゝ人ゝゝゝ。その號ゝゝハ

妻とゝ呼人良人と齊眉ゝゝ。その子ハ源氏の嫡流ゝゝとも又の朝臣ハ朝敵ゝ

明ゝ地ハ被露ゝゝ義盛が子とせんと固ゝ望む所ゝ。ゝゝ易くゝゝ

ゝゝと懇ハ諾ひーゝ。朝絵ハ感涙拭ひあゝど。ゝゝ義盛が侯ゝゝひハ

ゝ安堵ゝ。見ゝゝハ二難の室も隔ゝゝ。ゝゝ陽ゝゝ。妻と

ゝゝく日を送りぬ。却説春暮夏ゝく。その七月の中浣。有一日朝絵ハ産の

乳つゝて。男子誕生ゝゝ。義盛殊ハ欣びく。ゝハ二ゝ家の三郎なゝ。今

朝ハ生る日ゝゝハ。初声を揚ゝゝ。朝日将軍の亂なるよゝ式

題ゝハ欲ゝゝゝゝハ。阿三丸と名つけーゝ。月比些ゝけゝゝ。

且ゝゝ人ゝゝゝゝ。この年冬ゝゝゝゝゝゝ。親族朋

友ハ告ゝゝ。五十日百日の祝ゝ。酒宴ーく拵ひーく。疎ゝハさゝゝ親き

ものゝ。伴の赤子を義仲の遺腹子と誰ゝゝゝ。只義盛ハゝゝ。産

せーとのゝゝゝひゝ。さる程ハ阿三丸ハ。質弱ヨヌ病いゝゝゝゝ。夜ハ日ハ

ゝゝ嗄のゝゝく。三才ゝなるゝゝ。ゝゝゝゝ。況や一室の内ゝゝ。這

あるくことなりがたしとて人命傷いたくそこなひて。唖子ゆやあらん。聾ゆやあらん。
生さえた憑ーふぎとて。指ー美ふのさへあれば。義盛はいとどーくわぬる
ちかづかのごとく。愛まさこっろるりけり。現そひ内ゆある。人の乳色の凄じ
くて。鞠絵は胎ゆ五霧のるる月日の形なく。又うち歎く々ぐとゆ乳母
葉くゆ嫌うひてや。阿三丸がといとう。むつる声のまてけるべさてあるこ
てたるこ子くる。渠ゆ系ふて母の形。拙式ふとまらまやとこひとろつのこいふ
ぐひろゆとどいゆたくえんどいふ形。義盛は女童ーく。鞠絵を呼ーてあくま
るる室の内へ招たよせ。いふまくーてはいく遍。嘆息ーつさていふゆう。豫
よりふひゆとどと急くべたとゆもあらざど傷の人ゆはんが仮あくく。ふ
まぐ然止ふ。ふとつくくと阿三丸が生さえた式推量ゆる。武士ゆるべた
あゆあらど。獅子は生とるぐふーく。奮振の勢ひあり。蛇ゆ一寸ゆーく。

そのゆ式頭ゆ。そはゆあらぐゆの児は三才ゆるゆぐ一歩も運び動ふ式
せど。おいふとまふ叫ゆ孤ゆ差るーく生育とも柱弱不具の人ゆてならゆ。
勇士の子ゆは嗚呼るるゆ良将名士は種るー。といゆーはよりいゆれど。
ゆくまで親ゆは肖ざるゆくゆいふひるたゆも限りあり。よるてこれゆ
児を。法師ゆせんとふゆ。一子生るとたゆ九族天堂ゆ生るといゆる。
親の菩提を吊ふぐゆ自も亦過世の悪報を滅却さるゆ仮あり。就てこの
戒力をとふ。ぐうとふ。れは芝源家の先祖多田新発意満仲の遺物ゆ。
佐殿頼朝相伴ゆるひ式治承四年の役ゆ。ゆ祖父三浦ゆ義明老命を擲く。
恩義を泉下ゆ竭しる。則没後の勸賞ゆ義盛ゆ賜り式。こはこれゆ。と接
そるゆち。鐘まいと愛さく。不動三麿邪の形状倶利迦羅龍を鐫ゆされ。
倶利迦羅丸と名付ゆひ。ゆまべ見ゆるゆ又有ぐたる宝ゆまゆども親と

ある子とゝなる三歳の小児のあるを出家を勸る牽出物ことなるを拾やゝある。
相摸なる和田の岬ハ義盛が采地なり。彼処ハ女僧院あり。その子と乳母ハ
抱ゝく。翌ハ岬へ赴たゆへ後こゝでも親子ゞ衣食ハをりく贈り来たべゝ。その
子ゞ得度をるまでハ未遥なるとなぐらゞさぐるたゞ口のるさゝハこと式沒ど
如此さゝらひぬ。ところゝるゆとりゆひそと正首ハ視示ゝ刃をゝ鞆ハ納て
妻ゞ屋とりハ周たゝ。鄉と月を起ゝく出ハり。鞆絵ハ額をゝさげそうち
ゆくりゝ浅ゝく。若ゝ九四月の浮雲ハ憑む樹下雨ゞ漏る。この世ハ假ハ笠
やどり。長くもあらぬ命とハ。豫くゝゝと又さらハ。さらゝ尝紀を究めつ。ゆゞ
子舍へとく立ろまハ啼くくゝゞれく熟睡せゝ。阿三九ハ枕させ。衣打被る
ゆゝ。乳母葉ゆハ御ざりけり。現人世の栄枯得失今ゝ式ゝゞぬとゝるゞゞ。
木曽殿亡させゆハ鞆の人ゝ冊ゝ金の九玉の床。綾羅ハ錦繍ハ寝室ざり。ゆゝ稚子ゝゝゝとも襁褓より。鎌倉武士の季子と生も変りゝ
そゞゝハ廢人とくゝゝとゝらゝとゝハ。ゝゝゝ鞆ハ前世の報ゝとゝゝ。ゝゝ抱た
揚膝ゝ載揺動ゝもゝゝ式ゝ寝白式雲時ゝち熟視ゝ。西も東もゝらぬ
子ハ吟ゝ式ゝく扨式ハ式ハ式ゝ行式ゝ雑ゆゝゝた。いゝく盃ゝゝたゝゝゝ浮世
の式理の柵ハかゝる熟ゝの方ゝ。ゝゝ憂ハゝゝる命ぞと。ゝゝ式てゝ假寝の夢
ハハゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ後世ゝゝゝゝ抑吾倩枕付つゝ式ゝゝく
身を汚さゞゝゝ月日を送ゝゝ。稚子を人ゝせゝ。ゝゝハ久方の
蛭児の神ハ異なゝゝゝ三年孫ゝゝゝ式ゝ足立ゞ。ゝゝゝ式石樟舟浪のゝる
ゝの流さゝゝん。ゝハ千劔振神の代ゝ子を捨ゝ親ゝ。ゝハゝゝけん涙
葦原曲ゝハゝゝねゝゝ子ハ差ゝ西の宮難波の浦ゝ跡垂ゝ。ゝハ
つけゝゝゝゝゝ。ゝハ危ゝゝる子をゝ親ゝハゝゝゝ。實清和ゝ

かきおちは
たつきれ斧の
柄をとゝよ
やりむこゝろまぬ
世ゝそつゝけ

為家卿
倶利迦羅の
戒刀暗了
母子を激を

皇別なる。ゐん父君ゐてそ及ぶ。和田ハ桓武の後裔なるべ。ゐん者ゐ養ひと爲む
とゐ。たぶうゐらぬ武士えとゐひーとゐそくぶゐめゐく。法師ゐ世よといゐまとる。
そ是恨ままくこれ死ん。ゐん身も共ゐとゐゐゐゐゐ。隱ひとゐれど人も
ゐる彼ゐそ木曽ゐ高嶺ゐ母の鞆絵ゐ縁ゐ連く。美盛ゐ子ゐゐしゐど実ゐ
の悪業報ひまく。おもゐいゐど足さゐど愛を養ゐゐ失ひ。世ゐも人ゐも
疎まく。法師ゐゐりぬと仇なく。指一笑ひ人の口ゐ。戸ハ立ゐまゐど四阿乃。
間屋の廂を住棄く。身をゐく山ゐ竜ゐとも。ゐん身もゐゐゐ恥ゐゐひ亡ゐ
君の名を降さん。朽をゐひべゐへゐゐゐひ。とゐい人母ハゐゐ面なー。ゐひー
ゐハ化野の草の原ゐる主親ゐいひくゐもゐゐ衣身の幅陵ゐ世ゐゐひ
ゐふ。そでゐる死人ゐ妻とゐふ。その名ゐゐゐ武貸ゐ袖手ゐ一度も触ひ。
つけゐる帯の曲結ひーまゐ妹と使の。枕ハ絡く並絡ど。ゐゐ寝ゐてゐ

火のあとをゐゐゐもゐる乳母ゐ憾をゐひ涙く。身死る後ゐ霊ゐいひ。親族
ゐ名ゐめゐひそ。と泣くゐ人ゐゐんでく。乳口説ゐる有也ゐ也の関ゐ人目ゐ憚ゐひ
声ゐそゐ立ゐ音ゐ泣く。たゐちゐゐる一滴悍ゐゐゐる恩愛ゐ脆ゐゐ袖の
ゐ。胸ゐ砕る歎ゐせり。且く改武撞ゐゐる死唧言人やきく。女ゐゐゐる武
門ゐまゐく。勇悍と人ゐいゐまゐる。ゐまいゐふく惑ひ名流水ハ逝てゐゐひ。
往夏ハ悔て及ぶ。一念稱名平等利益十悪消滅即身成仏南無阿弥陀仏
と念じつ。右ゐゐ刃を抜とりて膝ゐ刺殺
さんとゐる往ゐ苦と叫びく膝の上ゐり。滾落る武引ゐゐる。背後の紙門
蹴ゐゐく。ゐゐ待ゐ人と禁めゐんぞ。業ゐ携ゐる葉ゐん。さくゐ仮色声
ゐゐると振拂ゐ袖の下ゐり。渚ゐ武掛く阿三丸を奪ゐがぐく倒ゐ抱きとり
たる生死の隔遽迷ひく。起つ居つ。膝ハ戦く弱鳥の羽と傷ゐまー風情ゐて。

抱き締めさせよと泣幼主を横はして衣領をこぼけば乳を推つて哽ぶとやがて敲に著る乳母も共に声を呑て泣より外はなければ靭絵はらはらと愛。洩りやせんと亮陽を引よせて。やよ葉の縁故我昔ざまに駭もせん。胸も浅ましん禁る我憎しとおもねど親と子を殺を。什麼苟且のみたらんや。明地のいらひくこれ。ぶうんとやくもあるまじく益なきその子を措て疾退生よ連係せふまてく後悔をるといひて刀をとり直し。おのれ思召さばさもあらうん。和子のうへより支起りく。あらじの殿の仰せしのも。和君がむとりごちのみ縛の顛末不意彼処に竊生なりゆえ出さらう悍くまうませば必死とおひ決めの理り逼てハるるく。禁る我嗚呼と思召べ。さらとるぶら。修よりの側視八目黒白も別ぬこらんのみなまとど。縁あまばこと襁褓より。乳母の糸ありくさを三年。その義をいつば主従の滅を推せ恩愛の奴とるりて且暮の堂の殊翳の花塵さんをそば孚し。和子の必死を外るるよ連係をられそと宜ひをとそ憾るまを。和子ハ虚弱まもせば表彩もおいるとも世の倨子とり晩苗ゆ待り。おとく人のいるで。生涯ものとくとるさんや。物ころれの逕言ゆ感されるひとる大刀祢みいらんびるくとる。生家我姫ひるるぶるる顔けるい。舊里へも供しく。通男子よ臣なら。田舎の壌を足踏固めて。牛ゆも突きば馬ゆも踉まば穴肥て。骨逞しく。徒男よりぬと。ゆめえるるば。殿ハ悔しく思召て召吹さでやハ己のるん。ろんハが良人ハ安房国朝夷郡なる。大瀦浅江の農夫ゆく。豊六と呼まなり。いと貪くハなまとど。人のるゆハ骨を折心を入まこく恩と甚ばいと憑ちきのるぶら。過世ろくて病炎ひ一年あまりうち朴ん。秋ろ調ま漬らまくいとで。せんまべるりしるば。その夏拳一一女と親ちらばとりいふのみ。

上総の人に養とらせつゝかゝる遠き乳を售て。この鎌倉へ来りぬるにやがて良人の
病著平愈り。今まで養ひまゐらせし程に音耗絶たれば。母御前かたへ共に。
安房へ赴んとて。波風騒がしくて港口の出船日をまちあり。峯の嵐はちらさば
とも。枯る木の実ハ用ゐなき身のなる果をとらそば後の栄を結ぶまゝを
聴きば惜くもあらぬ命なり。和子がなたに死なばやとおもふより外侍らぬぞと
口説つ泣つ引提し刃に背つ者ある誠忠義に顕れて。日来に似げなる諫
言に慚く鞆絵ハやゝほども落る涙とめ居たる目に合る刃を真喋と棄て。その身も
其処に礎と坐し。葉も微ぬものひそへるる乳母ハ親に異ならぬ恩愛に絆されて。
刃の下にて身を厝ふる逖しともあまりあり。況やこれハその子の母を憎しとて
鬼々しく正ろ者挙動やハさべ。焼野の雉夜の鶴。凡生とし活る物子をおもハぬ
るも世なるに母がつらうる子を殺さば。さて人の道なるべしともらざるものか

屓を濁して識りがん識らバ識も武夫の家に生れし習浴へ親子もろ元阿容とと
法師ならバ後この識ハ只今今丸を殺を悲しきにあらんとあらし識
あらるるそるそに留むべきもあらず寔にその子ハ和田殿の胤ろ孫も養
育の恩義ハ実子に異るみに不便のれば。ふ志をひろる日来に似ずと思ひけ
なく法師に世よといられしとこの戒刀をあろしまらう玩つふく推量れハ。おも
あひもるる廃人と後さへも憑しるらば殺しく識を寶とつ謎なるべしと
思ひしバ宜土の首途母も子も。おるべし道にと突らけ刃ハあるふの牽出物
截味ハやらご弐さるど千騎萬騎の敵軍を砕靡る太刀風も。子ゆゑ迷ひ
匝く奈麻余多の甲乗よろくぞそろくる桂帯られ諌られく今更ゆ。おもひ
めへせバ悔るの歎それ。あらぬ綱わつ。とめてこれ難題よむのおこづく
足らざるし。言葉よ伸も竭さきし。若しき胸を猜せよといふバ良く沈吟ど。

こゝろくも解せぬひとなり法師にせよと宣ひし。そのこゝろは志らされ侍れど。刀剣を賜ひしとく殺しなりで世間の武夫の子は娼ぬべし願に人の口もうるさし。一旦この子を遠離て徒に生育や不成もんとく如此さとかけなひさる謎なるが解みる殿のこゝろにて可惜命を損なふ物体なく侍らずや枉て己が下にうち任し潜びて生させなへりと勧まつり、隠れ掉己が勝手に判さまつりぬが。さもありぬべきとなるが。雨夜の月と暗からぬ身を闇してわろ共に吾侍るまつ武出でしさうまそなきこの誠忠に差て己が子を頼む旧里へ率てかへりて。夫婦が中の子ともてより。徒に人となりて志気あるもなるが母なり養父のみへ窃に告て武夫の八十うぢ川の瀬に入は時武やもちゐるべく剣刀名を揚親を顕せと如此の如う武侍へてくず又その性は鈍くしく鳴呼る命なるなるが実の父はさらにもいわず養父のみもこゝろへもせ心まゐらせ

なりなば。物成後武よくもてなりし慨しく洩しるなどこれはそのくち武憾るめん努秘てよと視示せば菜子は目を拭ひしこゝろやさしく思召せ良人にもそのこゝろゐるさていゐでなへ人に志らすべきと誓をまつりぬが。うち点頭て是にて安堵さり。さらば像見をとけんとて匣の底を撥捞り。数は十枚か七枚か包し金をそゞまに路費にせよとてとらまゐれば。志ゐゝ辞ひくすなやくに帯の間へ収めぬり。めくさ又鞘絵は匣の中心より白絹をさし出つ。己が子のみへ推向てさゝやくとうち開きこれ木曽殿のおん旗と義盛分捕志なひし我後世吊ふ料にとて。己取て秘なきつこのまゝゆりくどくらせるなが。こゝろえゐのつきのやせんせなて一筆遂さんとてく。右の小指を噬砕き件の絹に血を染て恩武あて親とせよ。義に仗て友垣結べこゝまで武かねるなのは君え四海皆兄弟ぞ勉よ已と書とぶれ。巻てまた菜子に逓与て又に戒刀をとり揚て膝に推立てこゝまで乳母を

既に死る丸が為め第一なる養親の記念に多田満仲の遺物とて源家に
よりある宝刀なるべ。その説に曰莫邪の名剣玉を截鐵を辟るとぞ
伝へ試さばいかでその能ところん。今面りかたろうて子の衛に
まべけるといひつ刃とり出し。腹へぐさと突立れば。これいと驚く葉子を
ある音なりと推禁めく深痍に屈せび息を吻た。死まべた時に死ざまに死
まるかはまた恥あり。といかに人の金をまと言の栄名ひあにさらるるくに
勇もなく名もなくかりまぐかに恥ふ死せるべし。栗津乃原の敗軍に
勢竭き生拘らるる君が黄泉の倶かるさまを仇なる人に対と寓く形る死世に
形る死子ゆ恵の闇に迷つ煩悩の犬に送られ。月日嵐去る残光に南柯の夢はさめて
知る。三十年の非威や三教具足の智識にそ。この倶利迦羅の戒刀なれ。和田殿
これをあらまどに丸と激まとよもるる。阿容こと存命に識と釀し恥を

累孫にかめ、べよや義盛ぬし親子が命球さんとく。それる大刀なるらんとも。
今とまかるも鮮らびしく。阿三丸を落しぬ遣らば。ヨ三只恩義に負くそのの
子が人とるるかれこと是ちのよう球伝へよ。幸に美るく人なるを小方
長く親の智勇を禀嗣とも。木曽殿の落胤とて鎌倉殿に弓を奉ず連
係ることあふ孝ゆもあるまじ義ゆもあるまじ却父祖の名を汚さん只いつそ義盛
ぬし球実の父とおひとりそその為の武勇世に伝へ召くさるる時あらば。おのれが
勇ゆ清ぶとなく忠孝節義を宗とく親に仕君に仕功成名遂て身退け。
却てこの後に木曽殿の落胤と人に云るとも絶く世に恥なるべいひ遺言の
紫草繁くに伝へあやまちなんと是ぞ滅ぶ母が所贈この外に何をかいとも。
形見とて八区葉に書まべく紀憶して告べくに伝てとべ。教べくに海てとべ丸を
木曽殿義盛ぬし。そなたこの良人豊六とやん。一身やて三個の父なり。三

歳ふるく身の暦ところは。と五戒幸といふべき欲又只不幸といふべき欲。塞翁が馬欲現ふ。の死もこころをも今やかをる。かくらぬ五戒周旋しく時を移し。人をくん輙くさ戒出さくん。折もよく黄昏さう。背門の冠木の鎖きね間ふとく起臥の准備をせばや。といそぐ戸と吻息ふ流き下無潰る鮮血ふ浸を衣の色枕の裾野と深るの世り。葉木ハ代に毎る。辱さと哀しさの世かくも。るの死袖の雨ふ涙ふりかる和子のうくぶ。天刎命ふもうそて浮こ世くん。さいさるのぶふ年を経く。物のこころのつ死ふ。世の憂ゝ多ハ天離る。鄙の住居のこびーさふ。るの形るの死みの虫の父恋ーとくるの死の死況や枕ふ先さ。ふ。てその落戒仰死てハ木晩茂ふこけ濡る。露る袂ハ朽ぬべし。狼水伝ふ。孤ふさ尼とるりても存命く。科戸の風のをりくふ後り戒代せこるのふ。よる憑ーく。辱く。憂を慰むよとぶとも。なるぶまーふを楞縄のたるぶき

別五戒假寝の夢ふもくでまるとるり。今ぞ一世の辞別ぶー毋御前の臨終ふ。
光るハぎや光るくとる起ーても現るく。再麻せー侯雑児を抱る揚るも力るく。
靭絵ぶほとりへさー書もれハ引著て目を睜る賢愚その差ありとふとも。
形貌ハ父と毋ふ禀子とりく親ふ肖ざるめハ病病の殺さとこそ。なくん。
けるるるこそ魂影躬ふそるく力を戮ー。武勇智略ハ実父のごく志ふ。
養父の如く。膂力ハ毋ふ十倍せる。壮士とるさそやハ已ん。おるとて。靭絵ぶ
自殺ふ思ふくく。和田殿留めるふとも。そぶまゝおるふ留りてハ久後却ふと
るー。一旦艱苦の街衢ふ走りく。その筋骨を固せば竟ふ勇士とるりぶ。
さいふーの常言ふ三さび骨を折く後良医とるふとあり。その白
絹ハ実父の像見この戒力ハ養父の記念両るぶ。血ふ涙くる毋の記念ハ二五
ふと傷口ふくふ戒さ入れく。五臓を低る引出を。隻子ふこぶ子を推仰けて。

目口をこらして彼り入る。鮮血を噎く泣叫ぶ胸前楚と撮倒して乳母が泣とり入
投退く。俯ゆるまく死でろう。勇婦の寐期そ目さまり死靭絵が子舎を
母屋へをく。住るめも見ずゆ。そを見てとり母屋へ借とらえて。人いかで三九と
ちらを。日ハさや暮く窓より漏る夕月の影明くハさせど。遠迷へ泡菜みを。
烏夜が追ふ心抱して。夢現の境ををくまで只主命を仇ハせじ。とそふだりが
気絶激しく。まづ戒刀の血を拭ひ。靭が納めく腰ゑ佩懐紙を推ふさして朱ゑ
深ふる阿三九が口のめぐり紙拭ひ去るゑ泣も引せず息もせじ。とハ什麼
いふと。四月うち騒げど繰息ゆく。抱ハ遑るゑ見ばそがゆるハ北背ハ貝ふ
揺揚て。彼白旗を背ゆ。投掛て引繰ゑ涙をゆ向の水みて。靭絵が死
骸をふ拝ゆ。裾ゑひくく引あげて。走り去らんとゑる。孫ハ背後の紙門推
開く。葉ゆ等とゆとも紙。吐嗟とだりえるまで。見則別人ゑらじ。ゑるど

和田義盛ゑ袖ゆく掩ひ。ゆ燭を抗く。靭絵が死骸をつくとえて頻ハ歎
息。勇ハ必義ゑ知ゑ。と聖語宣ゑるゑ。ゑこの婦が義ハ勇む心操を
よく知らされ稚子が質弱ゑ病物の怪つけく置。死人の排謗を伝ゑ
汚塵ゑ母が歎死の痛しさハ彼ハ親子と三浦へ遠離生云ゑを名紙ゑ
とく。倶利加羅の大刀をとり廿ハ擬きめハ武を激ゑる。ゑ表なゑとも
時ハとりてハ呉王が伍子胥ハ與ゑる屬婁の劍ゑ似ゑ。かれがごれゑ武紙
ゆく。可惜勇婦を殺ゑ知ゑ。嗚乎悲り。あやまちぬ。ゑ知ゑ泣ハ孔母葉
ゆ。幾靭絵が遺言ゑりとゆ阿三九をねく。ゑ知ゑ既ゑ親子乃義を
結び。義盛が武士ハ泣ゑ。死くの後ハ妻靭絵ハ何紙ゆく面を合せん。
その子孩弱不具ゑとゆ。一知無命の地と烈く。生涯安く養ひるゑ。やとゑれ。
とゑびくはを失ぬ態しく生んとゑゑ。義盛声を知り立く。阿三九ゑ

こゝな子ゑ汝乳母の分際ゆゑ。理なく倶しく逐電せバ。是則盗賊なり。その身ふ
崇なるらんや。彼推とめよと敦圉バ。唯と應て婢们群〻と走来り。引戻さんと
走る程ふ室内俄頃ふ陰こと。吹入る風毛骨を竪て。障子亮隔鳴わたりぬ。
走り寄んとせし婢们ハ。こハいかにとて蹌こと引く。さるたく共ふ尻
居ふ撲と轉輾ハ。義盛ますく焦燥て。手燭揺遣り。衛と寄て捕んとする
腕灘麻て。さるみぐハ雲霧廻ぐぞく。忙然たるその隙ふ。葉ハ背なる。阿三
丸を又揺揚て閃りと下る縁頬より。庭の木立を潜脱て。颯と推ひらく片
折戸。出るとみれバ前面なる門の鎖ぬ間ふと走去ぬ。

初輯第二　月夜乃竊立鳥　鶏鳴の野島舩

却説乳母葉ハ阿三丸を背負て。月を燭ふしく走る程ふ。臆裡ふおもふ
やう。稲村小壷の濱辺なれどもへ安房上総へこえし舩毎日ありと豫て聞のとも。
彼処ハ舎下ふ程近り。若舊帆るき縮あへど。君所の人〻追蒐来て引繰
されなバ。おもて雨ゐえ。金澤なる野嶋へいゆらバ。追ぬありともとてろ
つって輒く前面へこえバ。さしと忽地ふ尋思し。東を投て喘〻足ふ信して
走るあつら。背ふ小児を載さればいとゞ走く疲労果て。あの運ハ果敢ならざ
辛〻く子二ッのころ。件の海辺ふ来ふさと。真夜中なれバ舩を出さず。
一碗の白湯をともえむやとおもひしが。浦の苫屋の戸を敲くふてらくしふ
息せバ。只。鼯の声幽なり。せんすべなくて。縦馴し松蔭。今宵のやどしと立寄て
かさなりし枝ふ夜露を禦せ。やがて株ふ尻をかけて。ちふちぢめて阿三丸を背より
撿おろし。月の光ふとさんかすんバ。眠るが如く。死せるが如く。揺起しても呼活ても
息もせバ。動きもせバ。胸背浅まて八なるろく。ふ衝も汀渚よる泡と共ふ消べく

野鳴が墻
阿三丸
鮟を

うち歎く声は千浮の夜の猿腸を断可く且して目を拭ひ遽迷て出しかど。
菓餌とて准備はねせざりし其の儘に縡絶たり。亡母君は冥府より。憑かひ
なれ已に絶しも只憎しとのみおもひとらめ。彼仰に悖るとも。おそろしの殿が
ぶひ見しく留めさせたまひける。そが随彼処に留りなば又せんすべもありなん
あの縁約とおもへで悔しくも走り出て今宵丈に筧へとて還らば舊里へ
ゆくよしもなし。進退こゝに究りぬ只亡骸を抱き。彼処被死て水屑となりなん。
いかにせんとおもひつ。早かり。鶴尾坐艘ゆく。左右は虫の跡なりなる暇はなよ
みせおはなる浦の夜風に中ぞもあらが被るよしなきにぞやは彼処の門を
まづ開きや。と苫屋の軒端に立よりつ。又戸を敲ぬ呼覚しぬべく宿かる
求まども地方の法令。宿を借さず。前面へ便船まる人などは天明て来ませ。
とぞいひ再てとりもあへざる。菓子は鳥乱こと人をよりみん。世を

なきて涙の泉掬びあへず。身はいとや水る阿三九を懐へ袖をぬきて掻く
抱き身よくとのく音に磯那鳥友よどにしくもとくとよせて臥ん汀の浪
津波の鼓に合せる松の琴。遠寺の鐘も音添ひて諸行無常と告るてふ。
長汀曲浦の羈旅の天。ちろろ砕く翅のなかにも秋はるどりにて夜も長
月の影寒き玉兎は西へ波を見しく。かる弓張の迹にゆく雁の羽風に降る
霜も東もしろくなりにけり。浩処に義盛が雜色郎越獣六郎と呼るゝ者、
夥兵十人あまり徒ねて葉子を追蒐来り。遙に見とんてしらず暁近く天に
焼残したる蕉火を投捨て皆失こと追取巻獣六郎ゝる声をふり立甲夜に
主君の仰を受四面四境へ部して谷七郷の出口はさらなり。稲村が崎七里
の濱港こを沽構まくまてとおもひたりけりし。荒磯の松に烏帽子嶋首隱
せど尾はえかくる。裸嶋よりまもるさとは良と読る假名澤のかくへ廻て追詰たり。

まろぶ達ハ世結ぶのくさり縁ふ乳の人馬士松張ふのむとも山も越さ
せび水ゆも入るび刺截おろしの為入る刺著草被てゆぐらゆせん。和子と遮
ふく縛をそく受ふと闘さろ。豫ふく先紀の葉ゆハるるく迎もせび。ある
ばまや獣六どの主命るのぶびさゆありるん人おのくその主のるゆこそれ。
亦鞠絵御苛の遂言重ハ。かろれこの身ハ拭らと命ゆかけて郎君とそびらく
預り毎ゆ女子ゆとりを大勢ハく。引立ゆくとゆ鳴呼るくまどゆ。といハせと
あくぎど獣六ハ眼玖睨り足踏ゆらとさてにぎんさり。舌長ハ。彼縛よと敷圍ハ
うけるる。と黙兵とも。衝とまりせあのく稚児と奏ひとらんと葉ゆが懐へゆを
突入ふく。引出ま玖るゆ遁ふさ〻ごとて携れバ突退蹤躅らゆ玖髻ハ素ゆと衣
破れ轉輾どもるゆは放さび挑手ひ泣叫ぶ声ゆ引ゆとく一国の遊魂西よりり
内れまるが如れ阿三丸が。胸のほとりへ礮と落て。懐へ入るとぞ。

不思議ゆるるる息絶ハ阿三丸忽地甦生ふく。血気力量ヨリ病ゆ
児ゆ仍ぎ葉ゆ抱まるゆぐ。左右の巻玖働ハ砲を掛るる兵士ゆ玖撥退る
ふく。ふゆ撞と投著ゆぶゆ駭屈ぬ黙兵ゆぞゆ隨て勇斗ゆ。起て八玲瑯
携ゆぶ滾び象棋倒の流足絡ゆハ立ゆるぎりけゆ。ゆる奇特ゆ葉ゆいうち
驚き且敬びこゆぞ正ハく母御苛の灵魂和子を衛りゆぬ。さゆバ枯木ゆ
花ぞ開く朽ふる條ゆ実玖結ぶ現有ふれ灵験奇特ゆ久後を衛らせ
ゆ敬ハゆと男ふ立前面ゆ呆る獣六ハ武者戦ふ刀鞘ゆふ玖掛軟骨唖子を
いハとる小児ゆ仍げる玖力量早技頑ゆ実の阿三丸るゆ推量ふく立ゆ
見能見坂の野孤るふぶ侍後川の水虎るふんゆゆハ眉毛ゆ唖を引ハ。続
鳧禪とも固ハん嵐の油烹弥るどてそ准倚せゆ。尻の戸須ハ堅固ふまれや組ん。
と掌を二三四ッうち鼓ふ左右の膝ゆ残りけく力足を踏玖三立向んとまる

祖父ハ忽ち沙礫ふけ一起ち尻居ゐ撞と轉輾び吐嗟と叫びく腰と打面を
撃て刃と起一。あゝ足場ゞゝとつけまバ。高々の堂ゆゐも水ハ漏る況や汝が顔の
皿うち碎く手浮とるさバ生拘んといと易う。其如る退そと沙うち押ひ力
の目打を吉のく濕しく又懲ぎまゐ立向へバ阿三丸信と疾視でゐを礼獣六
無礼ん母の自殺ハゝまと瓦なるゐ。今又父の使紙阻く。不孝を釀さべうもあら
祐ど。ゝまとハヨヌ病の瓦紙ゆて早晩父ゝ愛を失ひ一旦劫乞紙受さるゐ所以く
召せ爲とて。いまゞ一切をゐ立ゞまゝうゐ。ゝまゝ乞ゞ却親のゐん過失を
世ゐ廣うまるゐゐ似ゝう。乳母夫婦紙親ゝ憑を者ゞく苦中の苦紙喫し。
人の中なる人と成り。武士の数ゐも人ゝんと紀ゝ再會を許させゐゞ。ゐん過
失紙人ゐも者ゝ世ゞ母ゐ不孝の罪科紙贖ふゝとゞゝゐゝぬべ一ゐ今仰ゐ
隨ゞ紙ハ亡母の志。廻父のゐんゐゐゝゝ罷ゐゝこゝゝのはを口づゝら

よくまゝ世といれて腰越獣六ハゐ仰く呆ゝく舌と吐紙三才ゐく紙
ゐいゞ丸どのゞ爽ゐる。辯吉ハゐゝゐ紙ゐ。ゝまハ只物ゞゐゝまる欲怪物ゐゝり
とそゐく人ゝゐゞ紙後難道ゝまゝゐゞ。ゝまハゐゝゐ既ゝ怒腹て憑忠
一ゐゞ。熟ゝゐれゐゝり。毛を吹瘢を求んゝり。夫ゝゐゝゝゐゝゐゝゐゝ加勢を
乞て復来ゐん正ゐゝ敵ゝ背をゝん世そ逃ゝゝゝんゝゐれゐ續け。
と逸足生一く跡をゐゝんゝて走まるゐゐゝ一塊ゝ倒ゝゝる。鞍兵ゐゝれゝゐ一
ゝゝゐゞゝ雲時も擬紙ゝべ紀燃るゐゐゝゝゝゝゝ後ゝゝ世ゝ刃を起一。
一町あゝり先ゝゐる獣六ゝ佶ゝゝゝ。戎ハゐ紙抗扇をゝゐ紀洲崎金澤の
入江を遠ゝゝ。鎌倉のゝゝ落ゐゐ紙この隊の頭人腰越氏獣六郎ゝゝゐハ僻
目欲誘ゐゝ共ゐゝゝゐん結ゐゐゝ人ゝゐゝゝ。むゝくゝゝゝと味鴨の騒くゞ
ゞ如く逃亡ゝゝ。この時既ゝ天ハ明つ。宮屋の門紙開ゐゝゝ。件の為体をゝ一浦人

ホハ泣ン婦ノ咄ト笑ヒ乳母モ打ツ眉ヲ顰ヒ安ク彼ホハ潭ヒ安ク
ハ房ヨリ船ヲ借ントハ後ノ崇ハ如何ト浦人ホハ既ニ去ル三日ノ夜ホハ
古ヲ卷テ凡人ヲ呼ビ寄ヒ推辞ルモ宮屋ノ内ヘ招ク入レ叮嚀ニ
歓待シテ早飯ヲ勧ル程ニ船ハ艤ヲ建笘ヲ取入ル准備ヲ整ヘ舟
人ホハ如ヒ主後ヲ扶乗セテ帆ヲ揚檝ヲ操ツ野鳥ガ塒ヲ求ム今ハ
順風ヲ受ケ波上平ニテ船ノ走ルヨリ速シ。サル程ニ阿三九ハ追捕ノ兵獸ヲ
逃ヲ後ハ悍ク勇ルヲ知ラズ只尋常ノ小児ノ如ク船中ハ忙ビ戦ヲ繰ル
記憶ナカラガ如ク健ルヲハ絶ヘキノミニ仍ガリケル。葉ハ此ヲ
彼ヲ思ヒ不可思議ヲ皆霊魂ノ冥助ホヨ久後ハ嬉シヲ感涙ヲ
拭ヒ只彼君ノ菩提ヲ祈ル。過ル安房ヘ舟ノ着ルマデ仏名ヲ唱ヘケル。

朝夷巡嶋記全傳巻之一終

早稲田大学図書館
011888007166